

Rhodomela larix (TURNER) C. AGARDH フジマツモ 小樽高島・利尻島仙法志
(北海道)

R. subfusca (WOODWARD) C. AGARDH イトフジマツ 中之作(福島) 納(岡山) 利
尻島仙法志(北海道)

Odonthalia camtschatica (RUPRECHT) J. AGARDH カムサッカノコギリヒバ 厚
岸(北海道)

O. corymbifera (GMELIN) J. AGARDH ハケサキノコギリヒバ 利尻島仙法志・礼
文島香深(北海道)

参 考 資 料

- 1) 岡村金太郎：日本藻類図説(1900). 2) ————：日本藻類図譜 Vol. 1~7 (1907~
35). 3) ————：日本藻類名彙(1916). 4) 岡田喜一：海藻図譜(1934). 5) 東道太
郎：日本海藻図譜(1934). 6) 岡村金太郎：日本海藻誌(1936). 7) 瀬川宗吉：原色日
本海藻図鑑(1956).

新 著 紹 介

最近のシオグサ類の研究紹介

1962年から1964年にかけての3年間は、藻類学の分野における緑藻植物シオグサ類
(*Cladophora*-complex)の研究に関しては、まさに大豊作の観があった。すなわちこの期間
に100頁を遙に凌駕する量をもつ四つの研究報告の発表があった。著者名、題名、掲載雑
誌名等を年代順に挙げると次のようである。

- (1) SIGURDUR JÓNSSON, Recherches sur des Cladophoracées marines (structure, reproduction, cycle comparés, conséquences systématiques. pp. 25-230, Pls. 1-16, Paris. 1962. Masson et Cie, Editeurs.
- (2) JOHAN SÖDERSTRÖM, Studies in Cladophora, Botanica Gothoburgensia, 1, pp. 1-147, 1 map. 1963, Göteborg.
- (3) CHRISTIAAN VAN DEN HOEK, Revision of the European species of Cladophora, pp. 1-248, Pls. 1-55, 1963, Leiden.
- (4) YOSHIO SAKAI, The species of *Cladophora* from Japan and its vicinity, Scientific Papers of the Institute of Algological Research, Faculty of Science, Hokkaido University, 5(1), pp. 1-104, Pls. 1-17, 1964.

シオグサ科の主要構成属であるシオグサ属は、従来記載された種類数が300-400にも達するといわれ、緑藻植物中最大の属である。しかも、その体制の比較的単純であるこ

と、外圍条件により形態に著しい変化を生ずることなどにより、このグループの種の査定は大変困難なものとされている。このようなことが主な原因となつてか、その必要性が痛感されていたにも拘らず、このグループのモノグラフ的研究は、今世紀に入ってから殆んどなく、僅かに HAMEL (1924-1929) のフランス沿岸のシオグサ属の研究報告を見た程度であった。上に挙げた四著の中、(1)を除いて、いずれもシオグサ属のモノグラフであり、この点、藻類学に寄与するところが非常に大きいとすることができる。なお、これらの四著がいずれも学位論文であることは興味が深い。以下、各著について少しく解説を試みたい。

(1) さきに、JÓNSSON (1957-1959) はフランス大西洋沿岸産のモツレグサ属の1種 *Spongomorpha lanosa* (ROTH) KUETZING および *Acrosiphonia spinescens* (KUETZING) KJELLMAN の生活環を研究し、それらが単細胞の *Chlorochytrium inclusum* KJELLMAN および *Codiolum petrocelidis* KUCKUCK をそれぞれ孢子体とする異型世代交代を行なうことを発見した。この結果、この特性に加うるに色素体の構造、細胞膜の性質等の形質を考慮して、彼は、従来シオグサ科のメンバーであった *Spongomorpha*, *Acrosiphonia* および *Urospora* の3属を含む新科 Acrosiphoniaceae の設立を提唱した。今回の論文は、更に詳しいデータを得るために、上述の3属の他にシオグサ科に属するネダシグサ属 *Rhizoclonium*, ジュズモ属 *Chaetomorpha*, シオグサ属 *Cladophora* および *Lola*, 更に新科に関係をもつ *Codiolum* および *Chlorochytrium* の諸属の種類について、形態学、細胞学および生活環の様式などの面から比較研究をなしたものである。そして、研究結果から判断すると、先に (1959) 提唱した Acrosiphoniaceae の設立は妥当であり、更に新目 Acrosiphoniales の設立も可能であると結論している。

Acrosiphoniaceae とシオグサ科 Cladophoraceae を区別する際の主な特性として、JÓNSSON が採用したものを列挙すると次表のようである。

Family Character	Acrosiphoniaceae	Cladophoraceae
1. 生活環	異型世代交代	同型世代交代
2. 体制	heterotrichous form	heterotrichous form でない
3. 附着器官	多細胞	大多数は単細胞
4. 色素体	多孔円筒状 (CHADEFAUD, 1935 のいう type archéoplastidié pariétal)	網状 (CHADEFAUD, 1935 のいう type mesoplastidié)
5. ピレノイド	les pyrénoides polypyramidaux	les pyrénoides bilenticulaires
6. 細胞膜の主成分	セルロース II に近い構造をもつ物質	セルロース I を含む
7. 細胞分裂	核分裂に伴伴する	核分裂と関係なく独立に起る

JÓNSSON は Acrosiphoniaceae の類縁に言及し、上述の諸特性を考慮すると、この科は Ulotrichales (Chaetophórales や Ulvales を含む) に縁の近いものであるが、Siphonocladales や Siphonales からは遙かに遠いものであるという。しかし、配偶体の細胞に多核のものがあることは Ulotrichales と大いに異なる特性であり、また Sphaeropleales とは生殖方法や生活環の様式で著しく異っている。このような観点から Acrosiphoniales の設立の可能性が考えられると結論している。そしてシオグサ科は Siphonocladales におくことを妥当と考えている。なお、JÓNSSON によると、Acrosiphoniaceae の 3 属は次のように区別できる。

- { 体は単条 *Urospora*
- { 体は分枝
 - (a) 1 細胞に 1 個の核をもつ *Spongomorpha*
 - (b) 1 細胞に n 個の核をもつ *Acrosiphonia*

(2) ヨーロッパ大西洋沿岸産シオグサ属の 15 種類を References and synonyms, Investigated herbarium specimens, Taxonomical remark および Description などの項目に分けて詳しく述べている。記載文には、各種類ごとに、体を構成する細胞の縦横の長さ、およびその比率を表示する要領のよい図表が併用されており、さらに顕微鏡写真や大きい図が豊富に挿入されているので、各種類の特徴が容易に把握できる。なお SÖDERSTRÖM はこの報告の中で、一つの新学名 *Cladophora oblitterata* SÖDERSTRÖM を用意している。KUETZING (1843) の *Cl. rudolphiana* や, BLIDING (1935, 1936) が培養により、生殖細胞を観察し、*Cl. sericea* の名で報告したものはこれと同一であるという。

(3) 内容は I. Introduction, II. General part, III. Keys, IV. Descriptions, V. Doubtful and erroneous names の五章を中心としてなっている。この中、II の章はシオグサ属の形態学、細胞学、生殖、培養などに関する従来の研究結果を要領よく纏めており、私にとっては、これらの知識を整理する上で大変役に立った。さらにこの章には Delimitation of the genus や Intersectional and interspecific relationships の項目がある。著者はこの中で、従来のこれらに関する諸学者の意見を紹介するとともに、著者自身の興味ある見解を披瀝している。著者はシオグサ属をかなり広義に解釈し、かなり異質的な組合せからなるものという考え方で、次の 11 形質を基準に取上げ、それぞれの原始型および誘導型を考え、それらを組合せることにより、この属を 11 の節に分けている。

形 質	原 始 型 → 誘 導 型	
1. 仮根と枝の明瞭な区別	な し	あ り
2. 仮根の形成される場所	基部—上部	基部のみ
3. 仮根の形態	単 純	分枝あり、二次的に直立部を形成

形 質	原 始 型 → 誘 導 型	
4. 極性の転換	易	難
5. 枝のでる部位	側 部	頂 部
6. 生長方法と体制	介生生長(時に頂端生長), irregular organization	頂端生長のみ acropetal organization
7. 細胞と生殖器官の形	側面中央部膨張	頂部膨脹
8. 生殖器官の放出孔の位置	側 面	頂 部
9. 分枝の有無	あ り	なし, または僅かにあり
10. 生殖方法	游走細胞による生殖	栄養体生殖のみ
11. 生活環の型式	同型世代交代	無性または中性游走子による生殖をもつ世代のみ

11の節の名称を列挙すると次のようである。

I. Affines, II. Chamaethamnion, III. Basicladia, IV. Repentes, V. Aegagropila, VI. Boodleoides, VII. Cornuta, VIII. Rupestres, IX. Cladophora, X. Glomeratae, XI. Longi-articulatae.

著者によると, Affines は最も原始的な節であり, Longi-articulatae は誘導形質を最も多くもつ節である。また, 彼の見解に従うと, ネダシグサ属 *Rhizoclonium*, ジュズモ属 *Chaetomorpha*, および *Basicladia* は属として独立させておくより, シオグサ属に含ませることのできるグループであるという。しかし, 実際には, この論文では, *Basicladia* のみをシオグサ属の1つの section として吸収するに留めている。なお, 著者は生活環の様式のちがいは属以上の taxa を規定する形質に用いたくない意見であり, また, 先に紹介したモツレグサ属をシオグサ属から遠く分離させる JÓNSSON の見解については, 細胞膜, 色素体, ピレノイド, 細胞分裂のちがいが最も重要な特性であるらしいが, さらに多くのデータを集めるべきであると主張している。

IV の Description の章では, ヨーロッパ産のものを中心に, 43 種類を記述している。この中で6種は新種であり, また2新変種を含んでいる。各種類については, (1) Nomenclature, (2) Description, (3) Ecology, form range, and systematic position, (4) Reproduction and life history, (5) Distribution の項目があって, 頗る詳細な記述がされている。Description の項には, 調査された各標本について, 頂端細胞, 枝の細胞, 主軸の細胞等の直径および縦横の長さの比率が表に掲載されている。また多くの種類について, 培養による観察がなされ, 配偶子や游走子の大きさの測定値や図が多数記録されてある。これを見ただけでも実に多大の努力を要したであろうことが容易に窺い知れる。

記述されている種類の中で, わが国のシオグサ類と関係をもつものとして, 次の種類がある。

(1) ミゾジュズモ。殖田三郎博士(1932)により *Chaetomorpha okamurai* UEDA の学名が与えられていたが、VAN DEN HOEK は、*Basidcladia* の一種と見做し、section *Basidcladia* に属させ、*Cladophora okamurai* (UEDA) VAN DEN HOEK と学名を変更した。

(2) マリモ。分類学上の所属については、古くから論議されていた処であったが、VAN DEN HOEK は、*Aegagropila* をシオグサ属の section と見做し、*Cladophora aegagropila* (LINNAEUS) RABENHORST の名を用いている。(マリモ類については、さらに次の阪井氏の論文の項参照)。

(4) 北海道大学植物学教室の山田幸男教授の下で、十余年を要した阪井与志雄博士(現稚内水産試験場)の労作。序章に次ぐ Taxonomic characteristics の章で、著者は注意を払った形質として (1) Colour of the frond, (2) Attaching organ, (3) Ramification, (4) Segment を挙げ、それらの分類学的価値について論議を試みている。第三章 Inter- or intrageneric divisions of the genus. では、初めにシオグサ属とモツレグサ属の関係を論じているが、後者が前者と異なる点として従来見做されていた次の4形質、1. Spongy habit, 2. Special branches, 3. Intercalary cell division, 4. Larger and longer terminal segments than the segments below, and descending rhizoids は多様性のもので、分類学的形質として適当とは考えられない。そして著者は、より適切な形質として (1) Rim-shaped septum (輪縁状隔膜) の存在, (2) Circular orifice of sporangium with lid (有蓋胞子放出孔) をもつこと, (3) 細胞膜の主成分の構造がセルローズ II 型に近いこと、を挙げている。次に著者はモツレグサ属 *Spongomorpha* と *Acrosiphonia* 属の関係について言及している。ここで著者は、PETERSCHILKA (1924) がシオグサ科のネダシグサ属 *Rhizoclonium* の1種で、細い細胞には1核、太い細胞には多核の存在することを観察した研究結果を例に引き、従来両属を分つのに用いられていた1細胞に1核か多核かの形質は細胞の容積と関係があるらしい。従って属性としては適当とは認めがたいと述べている。両属は、septum の構造、有蓋胞子放出孔の存在、仮根および分枝の様子など全く同一であり、よって著者は、この2属は同一のものであると結論する。属名は priority の関係で *Spongomorpha* を用うべきである。

次にマリモ類について述べている。(1) 阿寒湖での観察によると、球形のマリモの見られる所は限られた地域であり、これに反し芝生状の habit をもつマリモの見られる所は広範囲である。(2) 止水で培養すると、球形の体は漸次崩壊して芝生状に変形するが、流水により再び球形になることができる。これらの観察に基盤を置いて、著者は、マリモにおいては、球形より芝生状の habit が、より正常なものであろうと考察している。この結果、著者は従来のマリモ属 *Aegagropila* を独立した属と見做さず、シオグサ属に含めて、亜属として扱っている。著者はさらに従来マリモ類の名で、日本において記録された種類について再検討を行ない、その結果、マリモ、ヒメマリモの二種を独立した種類と認め、他はこれらの二種のいずれかの form として扱うに到っている。次に検索表を掲

げる。

1. 節間部は円筒状 *Cl. sauteri* (NEES) KUETZ. マリモ
1. 節間部は棍棒状またはビール樽状 *Cl. minima* (OKADA) SAKAI ヒメマリモ
Cl. sauteri (NEES) KUETZ. マリモの forms の検索表
1. 枝の主軸に対する角度は広くて、直角に及ぶ; 節間部は長くて、その長さは径の
(4-)7-20 (-26) 倍 *f. kannoi* (TOKIDA) SAKAI カラフトマリモ
1. 枝の主軸に対する角度は鋭角; 節間部はそう長くなく、その長さは径の (3-)6-12
(-17) 倍 2
2. 小石を中核とする球状体は、1-3層からなる; 枝は柔かい
..... *f. kurilensis* (NAGAI) SAKAI フジマリモ
2. 中核をもたない球状体は同質の層からなる; 枝はやや剛直である
..... *f. sauteri* マリモ
Cl. minima (OKADA) SAKAI ヒメマリモの forms の検索表
1. 枝の節間部の径は 70-120 μ ; 集合浮遊性 *f. minima* ヒメマリモ
1. 枝の節間部の径は (65-)100-170 (-240) μ ; 石に付着
..... *f. crassa* SAKAI フトヒメマリモ

次に、従来マリモ類の諸種に与えられていた学名と、今回のそれらとの関係を示すと次のようである。

Cladophora sauteri (NEES) KUETZING *f. sauteri*

(Synonym)

Cl. aegagropila f. sauteri RABENHORST, 1868

Aegagropila sauteri (NEES) KUETZING, 1843

Cl. sauteri (NEES) KUETZING *f. kurilensis* (NAGAI) SAKAI

(Synonym)

Aegagropila kurilensis NAGAI, 1940 (一部)

Aeg. sauteri var. *yamanakaensis* OKADA, 1957

Aeg. sauteri var. *borgeana* (non NORDEST.) KANNO, 1934 (一部)

Cl. sauteri (NEES) KUETZING *f. kannoi* (TOKIDA) SAKAI

(Synonym)

Aegagropila kannoi TOKIDA, 1954

Aeg. kurilensis NAGAI, 1940 (一部)

Aeg. sauteri var. *borgeana* (non NORDST.) KANNO, 1934 (一部)

Aeg. lagerheimii (non NORDST.) KANNO, 1934

Cl. minima (OKADA) SAKAI *f. minima*

(Synonym)

Aegagropila minima OKADA, 1957

Aeg. sauteri var. *minima* OKADA. in KOBAYASHI and OKADA, 1953

第四章では Keys to the taxa を記述している。ここで、シオグサ属を二つの亜属 (*Cladophora* と *Aegagropila*) に分け、それぞれの特性を記し、さらに *Cladophora* 亜属を、不定仮根形成の有無、体の基部節間部の環状のくびれの有無により三つの節 (section) に分けている。次にシオグサ属の亜属および種類などの検索表を掲げる。*

第五章 Description で扱われている種類数は 30 で、その中の 5 種は新種であり、さらに 2 つの新しい form を含んでいる。

亜 属 の 検 索 表

1. 体は直立; 仮根は一次的に形成されるか、または、時に体の下部から不定的に生ずる; insertion と evection は正常に起る …………… Subgenus *Cladophora*, emend. SAKAI
1. 体はクッション状; 仮根は体の各部から不定的に形成される; insertion と evection はゆるく起る …………… Subgenus *Aegagropila* KUETZING, emend. SAKAI

Cladophora 亜属の種の検索表

1. 体の仮根は一次的に形成されたもののみ (Section *Japonicae* SAKAI) …………… 3
1. 体の仮根は一次的に形成されたものと、不定的に形成されたものがある …………… 2
 2. 体の下部の節間部は環状のくびれをもたない (Section *Opacae* SAKAI) …………… 13
 2. 体の下部の節間部は環状のくびれをもつ (Section *Rugulosae* SAKAI) …………… 23
3. 主枝の径は 200 μ 以上 …………… 4
3. 主枝の径は 200 μ 以下 …………… 8
 4. 小枝は互生、またはやや偏生 …………… 5
 4. 小枝は明かに偏生 …………… 7
5. 仮根は糸状根が密に接着して盤状形; 小枝は少い ……………

…………… *Cl. ohkuboana* HOLMES カタシオグサ
5. 仮根は糸状根が密に接着していない; 小枝は密生、東生 …………… 6
 6. 基部の節間部は環状の線状模様をもつ; 小枝の径は 60-130 μ ……………

…………… *Cl. densa* HARVEY アサミドリシオグサ
 6. 基部の節間部は環状の線状模様をもたない; 小枝の径は 150-300 μ ……………

…………… *Cl. japonica* YAMADA オオシオグサ
7. 小枝の径は 210-380 μ で、単生 …………… *Cl. patula* SAKAI ミナミシオグサ (新称)
7. 小枝の径は 40-160 μ で、双出偏生 ……………

…………… *Cl. fascicularis* (MERT.) KUETZING フサシオグサ (新称)
8. 小枝は不規則にでるか、または互生 …………… 9
8. 小枝は偏生 …………… 10

* 学術用語の日本語訳について、阪井与志雄博士から少なからぬ助言と教示を賜わった。記してお礼申し上げる。

9. 体はゆるい束状; 小枝は少くて短い, 径は (35-)40-70 μ
 *Cl. oligoclada* HARVEY サイダシオグサ (新称)
9. 体はからみ合って団塊状; 小枝は密生し, 径は 15-35 μ
 *Cl. albida* (HUDS.) KUETZING ワタシオグサ
10. 体はぬるぬるしない *Cl. gracilis* (GRIFF.) KUETZING ナヨシオグサ (新称)
10. 体はぬるぬるする 11
11. 枝は二叉状で, 径は (10-)15-25 (-40) μ ... *Cl. speciosa* SAKAI ミヤビシオグサ (新称)
11. 枝は二叉または三叉状 12
12. 枝の頂端は尖頭 *Cl. rudolphiana* (AG.) HARVEY タマリシオグサ
12. 枝の頂端は鈍頭 ... *Cl. crystallina* (ROTH) KUETZING クリスタルシオグサ (新称)
13. 淡水産 14
13. 海産 15
14. 体は浮游性; 第一次枝の節間部の径は 45-60 (-100) μ
 *Cl. crispata* (ROTH) KUETZING ウキシオグサ (新称)
14. 体は付着性; 第一次枝の節間部の径は 80-100 (-150) μ
 *Cl. glomerata* KUETZING カモジシオグサ
15. 体高 1 mm 以下 *Cl. conchopheria* SAKAI カイゴロモ (新称)
15. 体高 1 cm 以上 16
16. 主枝の径は 100 μ 以上 17
16. 主枝の径は 100 μ 以下 20
17. 体は柔かくて, ぬるぬるする *Cl. stimpsoni* HARVEY キヌシオグサ
17. 体は剛直である 18
18. 小枝は径の 8-15 倍の長さをもつ円筒状の節間部からなる
 *Cl. fastigiata* HARVEY チャボシオグサ
18. 小枝は径の 2-4 倍の長さをもつほぼビール樽状の節間部からなる 19
19. 不定仮根は体の上部からも形成される *Cl. aokii* YAMADA アオキシオグサ
19. 不定仮根は体の下部から形成される
 *Cl. rupestris* f. *submarina* FOSLIE イワシオグサ (新称)
20. 体は柔かく, 短い, 高さ約 2 cm 以下 21
20. 体はいくらか剛直で, 高さ 2 cm 以上 22
21. 小枝は不規則にでる, 単生, 鈎状に曲らない, 小枝の径は 15-30 μ
 *Cl. pusilla* SAKAI コシオグサ (新称)
21. 小枝は偏生, しばしば鈎状に曲る, 小枝の径は 35-70 μ
 *Cl. uncinella* HARVEY マキシオグサ (新称)
22. 小枝は偏生; その径は上方に細くなる *Cl. opaca* SAKAI ツヤナシオグサ

22. 小枝は不規則にでる；その径は上方に太くなる
 *Cl. arenaria* SAKAI スナシオグサ (新称)
23. 潮間帯上部に生育；主枝の径は 170-320 μ ... *Cl. rugulosa* MARTENS クロシオグサ
23. 低潮線以深に生育；主枝の径は 800 μ におよぶ
 *Cl. wrightiana* HARVEY チャシオグサ

Aegagropila 亜属の種の検索表

1. 淡水産 2
1. 海 産 3
2. 節間部は円筒状 *Cl. sauteri* (NEES) KUETZING マリモ
2. 節間部は棍棒状，またはビール樽状 ... *Cl. minima* (OKADA) SAKAI ヒメマリモ
3. 体は柔かい；主枝の径は 120 μ 以下 4
3. 体は剛直；主枝の径は 140 μ 以上 5
4. 枝の頂端部は短かく，径の 3-6 倍の長さの節間部からなる
 *Cl. socialis* KUETZING ナンカイシオグサ (新称)
4. 枝の頂端部は長く，径の 4-10 (-30) 倍の長さの節間部からなる
 *Cl. patentiramea* (MONT.) KUETZING ホソバシオグサ
5. 小枝は偏生 *Cl. fuliginosa* KUETZING カビシオグサ
5. 小枝は対生 *Cl. sibogae* REINBOLD ネダシオグサ

上に紹介した四つの論文のほか、シオグサ類に関して最近発表されたものに次の報告がある。

PETER KORNMAN, Eine Revision der Gattung *Acrosiphonia*, Helgolander Wissenschaftliche Meeresuntersuchungen, 8(2), pp. 219-242, 1962.

ヘリゴランド島産の 3 種類 (*Acrosiphonia arcta* (DILLW.) J. AG., *A. centralis* (LYNGB.) KJELLM. および *A. sonderi* (KÜTZ.) KORNMAN) の分類，形態および培養による生活環の研究を行なったものである。KORNMAN は *Acrosiphonia* 属と *Spongomorpha* 属の関係について言及し，彼が生活環を研究した *Acrosiphonia* 属の 2 種 *A. arcta* および *A. sonderi* は，いずれも同型世代交代を行なうことから，両属は生活環の様式によって区別できると述べている。すなわち，*Acrosiphonia* 属は同型世代交代を行ない，*Spongomorpha* 属は異型世代交代を行なうものであるという。

KORNMAN はこのほかに，体制および生活環の様式に基盤を置いて，ヒビミドロ目 Ulotrichales 分類体系を論じた興味ある論文を発表しているが，この中で，彼は従来シオグサ科に含まれていた *Urospora* 属を，ヒビミドロ属 (*Ulothrix*) やヒトエグサ属のある種 (*Monostroma* spp.) や *Gomontia* 属などとともに，ヒビミドロ目に入れるのが妥当であると主張している。(PETER KORNMAN, Die Ulotrichales, neu geordnet auf der

Grundlage entwicklungsgeschichtlicher Befunde, Phycologia 3(2), pp. 60-68, 1963).

(千原光雄——国立科学博物館植物学第二課)

中国で藻類学学会議が初めて開催されたこと

植物学報 *Acta Botanica Sinica* の12巻4号384頁(1964年12月)に、金鴻志が第一回全国藻類学学会議の経過を報告している。次にその大要を紹介します。

中国植物学会と中国海洋湖沼学会との共催で、1964年7月下旬、青島において、第一回全国藻学学会議が開催された。会議は5日間続き、総合報告2日間、5専門部会に分かれての討論が3日間であった。出席した代表は55人、傍聴者60余名。提出された論文要旨は144篇。内容は藻類の分類、形態、生活史、生理生態、遺伝育種、生産力、窒素固定藍藻、単細胞藻、化学、加工利用、総合調査となっている。

会議では初めの2日間に、中国建国以来の淡水藻及び海藻の研究状況と、主たる成果の報告及び藻類の分類、形態、生態、生理、化学、加工、培養利用等の分野における国際的な動向に関して12篇の報告が行なわれ、あとの5日間に、5つの専門部会で8題目(名称、窒素固定藻、単細胞藻、生産力、ノリ養殖、コンブ養殖、其他の海藻養殖、化学加工)に分かれて討論が行なわれた。

最近数年間の中国における藻類学関係の主たる収穫として次のものを挙げています。

- (A) 養殖関係には 1) アマノリ類の養殖、窒素吸収利用、胞子の形成と放出。2) コンブ類の新品種の育成、遺伝、雑種強勢、春苗の培養、混水区(原文通り)の光合成作用、幼苗腐蝕の防止と亜鉛の効用。3) キリンサイの養殖。4) ワカメの生長。5) アルギン酸ソーダー。
- (B) 分類形態関係には 1) ホシミドロの色染色体分裂。2) 扭箱藻(原文)の細胞分裂。3) フノリの生殖器官。4) 水の華。5) 緑藻、紅藻、藍藻の分類。
- (C) 生理生化学関係には 1) 放射線の効能。2) イオン吸収。3) アンモニアや炭素の代謝。4) 微量元素の定量等。

会議のもよとして「討論中には年配の専門家も青年科学者もともに百家争鳴の精神にもとづき、それぞれ自己の見解をのべて問題を提出し、討論は極めて熱心に行なわれた……」とあり、また「……討論を通じて藻類学将来の方向と任務とを明らかにした。藻類学は生産の実際と結びついて、中国の経済建設面の科学技術的な問題を解決することを主要任務とすべきであり、同時に基礎理論の研究を強化し、重要な空白面を補填し、藻類学の全面的で健全な発展を保証することを一致して認めている」と記している。

以上の報告中には、中国藻類学会が結成されたい様子はみられない。しかし中国においても、藻類を研究材料としている研究者たちが一堂に会したことは重要なことであり、やがて日本其他のように藻類学会の結成される日も近いものと想像できる。

(神戸大・理 広瀬弘幸)